

韓国書誌学の最新成果にもとづく日本古活字 版誕生の研究

小秋元, 段 / KOAKIMOTO, Dan

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

4

(発行年 / Year)

2018-05-22

平成 30 年 5 月 22 日現在

機関番号：32675

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2017

課題番号：16K13195

研究課題名(和文) 韓国書誌学の最新成果にもとづく日本古活字版誕生の研究

研究課題名(英文) Research on the Birth of Japanese Moveable Type Based on Recent Korean Bibliographic Research

研究代表者

小秋元 段 (KOAKIMOTO, Dan)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：30281554

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：近世初頭に日本で始まった活字印刷(古活字版)の起源は、朝鮮活字版にあるとする説と、キリシタン版にあるとする説が対立している。近年ではキリシタン版起源説が有力になりつつあるが、その根拠には疑問とすべき点が多々ある。本研究では、韓国の活字版研究の最新の成果を踏まえ、朝鮮活字版から日本の古活字版への連続性を究明し、日本の古活字版の起源が朝鮮活字版にあることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：There are two theories regarding the origin of moveable type in Japan: the first treats Korean peninsula as the origin; the second locates it in Christian moveable type. While the latter theory has gained ascendancy of late, there is little evidence to support it. Based on recent research on Korean moveable type, this paper elucidates the connectivity between Korea and Japan's moveable type, making clear the latter's origin in the former.

研究分野：日本文学

キーワード：書誌学

1. 研究開始当初の背景

近世初頭、古活字版が興る時期、日本には朝鮮版とキリシタン版の二つの活字印刷技術がもたらされていた。これまで日本の活字印刷技術は文禄の役(1592~93)の際、朝鮮より掠奪されてきたという考えが通説となってきた。朝鮮版の活字の字体や表紙の文様などが古活字版と類似するほか、古活字版の技法が朝鮮に由来することを窺わせる記録も複数あるためだ。

その一方で、キリシタン版の活字印刷技術は文禄の役よりも早く日本に導入されていた。天正18年(1590)、イエズス会巡察使アレッサンドロ・ヴァリニャーノは活字印刷器具一式を日本にもたらし、肥前国加津佐の学林に設置した。翌年、『サントスのご作業のうち抜書』を刊行し、以後、布教活動や宣教師たちの学習のために、教義書・文学書・辞書の類を世に送り出した。

近年、このキリシタン版を古活字版の起源として認識しようとする動きが強まっている。古活字版と朝鮮版との間には技法上の差異が存在し、むしろ古活字版とキリシタン版との間にこそ連続性があるという考えが支持を得つつある。日本の古活字版は書体、版式、さらには表紙の文様にいたるまで、朝鮮活字版に類似している。しかし、組版技法に注目すると、日本の活字版が背丈の高い活字を配列し、その四周を匡郭で固定する組立式をとるのに対して、朝鮮版は匡郭の固定された植字盤に蜜蠟を敷き、そこに背丈の低い活字を並べ置く付着式を採用した。日本と朝鮮とでは活字の形状と組版の技法がかように異なり、これらの点で日本の古活字版はキリシタン版と共通点をもつとして、キリシタン版起源説は唱えられたのである。

こうした両説が並び立っているのが、今日の古活字版の起源をめぐる学説の現状である。その究明は印刷出版史の研究のうえで重要な課題である。

2. 研究の目的

筆者は2010年に「古活字版の淵源をめぐる諸問題 所謂キリシタン版起源説を中心に」(『国際日本学』第8号、2010年、『増補太平記と古活字版の時代』に加筆採録、新典社、2018年)という論攷を執筆し、キリシタン版起源説への疑問を提示した。それは、『世宗実録』『慵斎叢話』といった、これまでも朝鮮活字版の歴史を研究する際に用いられてきた基礎資料を踏まえれば、朝鮮における活字の形状は時期によって変化し、必ずしも付着式に限定されることはなかったことがわかるからだ。固着剤を使用する印刷技法が、朝鮮活字版の大きな特徴であることは紛れもない事実である。しかし、日本の古活字版の起源をキリシタン版に認める研究者らのように、朝鮮活字版は付着方式で、キリシタン版は組立方式、という二元論を立ててしまうと、日本の古活字版の淵源はたどれな

いと思われる。

だが、さきの論攷ではこの問題を論の末尾で、問題提起的に記したに過ぎない。それはこの考えが、文献資料の記述のみにもとづき、発想されたものであったためである。その後、この問題は筆者にとって研究課題の一つとなっていたが、法政大学大学院人文科学研究科博士後期課程・李章姫氏の仲介により、韓国の清州古印刷博物館学芸室長・黄正夏氏、韓国国立中央博物館学芸研究官・李載貞氏との研究交流が実現し、解明への知見を得ることとなった。

周知のとおり、韓国では活字文化を早期に定着させた自国の歴史が重視されている。それゆえ、日本の古活字版研究に比べれば、はるかに精力的に活字版研究がなされている。だが、それにもかかわらず、朝鮮時代初期の活字出版技法をめぐるのは、未解明な部分が多い。それは、たび重なる戦災や火災で活字や器具が失われたこともあるが、そもそも金属活字が摩滅すると改鑄されるという宿命をもっていたことにもよる。そうしたなか、黄正夏氏は朝鮮時代活字の復元研究を主導し、文献学的方法のみならず、科学的方法を用いた活字版研究を実践してきた。また、李載貞氏は韓国国立中央博物館が所蔵する活字の調査・研究を遂行し、朝鮮時代の活字に関する数多くの新たな知見を学界に紹介した。

このように、韓国における朝鮮活字版に対する研究は、近年急速に進歩を遂げている。だが、これらの成果は日本の書誌学研究者にはほとんど知られていない。ここで解明された朝鮮活字版の形状・印出方法などに関する知見は、日本の古活字版との連続性を考えるうえで、重要な要素となる。そのため、本研究では、近年の韓国における活字版研究の成果を日本の学界へ広く紹介し、日本の古活字版の起源を再考する材料を提供することをめざすこととした。

3. 研究の方法

(1) 研究体制の確立

本研究は研究代表者を小秋元段とするが、研究の遂行には、韓国人研究者に加え、専門分野における通訳・翻訳可能な研究者の支援が不可欠である。そのため、上記の清州古印刷博物館の黄正夏氏、韓国国立中央博物館の李載貞氏、法政大学大学院人文科学研究科博士後期課程の李章姫氏に支援を要請し、黄正夏氏・李載貞氏には研究情報の提供、李章姫氏には通訳・翻訳をお願いした。

(2) 研究情報収集のための会議の開催

2016年8月30日・31日にソウルの韓国国立中央博物館において、上記メンバーが出席し、研究情報収集のための会議を行った。

その場では、李載貞氏による現在進行中の韓国国立中央博物館所蔵朝鮮時代活字調査の報告のほか、近年の日韓における活字版研

究の進捗状況（特に、日本に紹介すべき韓国側成果について）の報告、等が行われた。

（3）国際ワークショップの開催

2017年2月25日、黄正夏氏・李載貞氏を東京に招き、法政大学において「朝鮮活字版研究の最前線」と題するワークショップを開催した。当日は、黄正夏氏が「朝鮮王室鑄造金属活字復元研究の現況」、李載貞氏が「日本古活字印刷と朝鮮活字印刷の比較」と題する報告を行い、日本の書誌学研究者約35名と意見交換を行った。なお、当日の発表資料は約2ヶ月かけて李章姫氏が日本語訳し、小秋元が監修して制作した。

（4）報告集の作成

上記国際ワークショップの発表資料を吟味精選し、加えて李載貞氏の重要論文「朝鮮活字印刷術が日本古活字本印刷に及ぼした影響（原題：韓国語）」（『東北亜歴史論叢』46、151-189頁、2014年）を日本語訳して、『科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）報告書 朝鮮活字版研究の最前線』を2018年2月に刊行した。

4. 研究成果

（1）報告集収載の成果

本研究の成果は上記『科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）報告書 朝鮮活字版研究の最前線』に集約されている。本報告集は3章より構成されており、各章の内容はつぎのとおりである。

第1章「朝鮮王室鑄造金属活字復元研究の現況 活字の鑄造と組版を中心に」は、黄正夏氏をはじめとする清州古印刷博物館が主管した「朝鮮王朝鑄造金属活字復元事業」の成果報告書の重要部分を抜粋し、日本語訳したものである。この事業は2007年から2010年にかけて行われ、朝鮮時代の活字45種の復元が行われた。この復元事業は単なる活字の模造をめざしたのではなく、朝鮮時代の各種の文献を検証してこれに依拠するものであった。また、復元の過程では活字の鑄造技法や組版技法の変遷について、いくつかの解明すべき課題があることも明らかになった。それらの情報を収載した第1章からは復元研究の成果ならでは情報が得られるだけでなく、引用された広範な文献資料や各活字の解説・図版にも学ぶべき点が多くある。

第2章「日本古活字印刷と朝鮮活字印刷の比較」は、朝鮮・日本の活字の形状を比較した李載貞氏の論考を日本語訳したものである。現在、日本と韓国に残されている古活字を見るかぎり、彼我の形状の差は大きいと実感されるが、実は現存する朝鮮活字の多くは、日本の古活字版より後の、17～19世紀に製作されたものであることを指摘する。また、李氏の調査により、1461年製作の乙亥字併用ハングル金属活字の存在が明らかとなり、これによると朝鮮時代前期の活字が日本の古活

字と類似の形状をもつことが明らかとなる。従来、日本と韓国の活字の形状の違いは、日本の古活字版がキリシタン版の影響を受けたとする大きな論拠となっていたが、本章の指摘はそれを覆す重要なものとなる。

第3章「朝鮮活字印刷術が日本古活字印刷に及ぼした影響」は、韓国の学術誌『東北亜歴史論叢』第46号（2014年）に、李載貞氏が寄稿した論攷を日本語訳したものである。李載貞氏が取り組まれている研究のうち、第2章では活字の形状比較が中心となったが、第3章では『世宗実録』『慵齋叢話』などの記述の解釈と、日本・朝鮮の活字字体の比較も行われている。ここでは文献資料の解釈上、キリシタン版起源説の成り立ちがたいことが論じられ、さらに癸未字・甲寅字・乙亥字本の日本への影響が字体の面から指摘される。活字印刷に関わる日韓比較研究の最先端をゆく論攷であると考え、今回、翻訳・収載を行った。

以上を通じて明らかとなった重要な点は、朝鮮前期を代表する甲寅字では、日本の古活字に通じる活字の形状、組版技法のあったことを認めることが妥当であること、それを証する資料として乙亥字併用ハングル金属活字が存在すること、さらには、朝鮮後期の残存資料（活字の形状、蜜蠟の使用など）を以て、文禄・慶長の役以前の朝鮮活字の印刷技法を推測することは危険であること、の3点である。これを踏まえると、日本の古活字版の起源がキリシタン版ではなく、朝鮮活字版にあったと考えるべきであることが、より明確となる。

（2）その他の成果

これと関連する成果に、小秋元段著『増補太平記と古活字版の時代』がある。本書の第3部第7章「古活字版の淵源をめぐる諸問題 所謂キリシタン版起源説を中心に」は2010年に雑誌論文で発表した内容だが、本書に収録するに際し、李載貞氏の論攷を踏まえた加筆を行った。また、人間文化研究機構国文学研究資料館編、国文学研究資料館影印叢書7『嵯峨本方丈記』では「解説」を執筆した。嵯峨本『方丈記』は日本で古活字版が盛行した初期に刊行された、漢字平仮名交じりの美しい活字本である。本解説では嵯峨本の装訂上の問題を詳説した。

5. 主な発表論文等

〔図書〕（計3件）

小秋元段編、黄正夏・李載貞原著、李章姫訳、私家版、科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）報告書 朝鮮活字版研究の最前線、2018、124

小秋元段、新典社、増補太平記と古活字版の時代、2018、428

人間文化研究機構国文学研究資料館編、小

秋元段解説、勉誠出版、国文学研究資料館
影印叢書 7 嵯峨本方丈記、2016、80

6 . 研究組織

(1)研究代表者

小秋元 段 (KOAKIMOTO Dan)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：3 0 2 8 1 5 5 4

(2)研究協力者

黄正夏 (Hwang Jeong-ha)

李載貞 (Lee Jae-jeong)

李章姫 (Lee Jang-hee)